

京都大学 URA 成果公開シンポジウム 2017 報告書

「京大式～研究力強化の本質」URA の活動紹介

京都大学学術研究支援室 (KURA) は 2017 年 5 月 29 日 (月)、京都大学百周年時計台記念館で、リサーチ・アドミニストレーター (URA) の活動を紹介するシンポジウム、「京都大学 URA 成果公開シンポジウム 2017: 京大式～研究力強化の本質」を開催しました。「大学の研究力」に関する本質的な議論を目指した 3 部構成のシンポジウムで、参加者は全国の大学を含めた研究機関や一般企業など 75 機関から 220 人以上が参加。研究者による講演や、研究者と文部科学省研究振興局職員を交えたパネルディスカッションを通じ、「研究力」そのものについて改めて考える機会となりました。

シンポジウムの目的

日本の大学における「研究力の低下」が騒がれる昨今、どのような対策が「研究力の強化」に繋がるのかは、日本の大学が抱える共通の課題です。その一方で、「研究力」とは一体何なのか、誰もが納得する明確な定義はありません。そこで、京都大学学術研究支援室 (KURA) が研究力強化に資すると考えて取り組んできた事業の成果を公開し、これをもとにした各方面の方々の議論で、研究力強化の本質と研究大学における URA の役割について考えることを目的に企画しました。

議論の概要 (ポイント)

- (1) 大学の研究力強化の取組を評価するポイントとして、各研究大学が大学の規模や理念等に適合した URA システムを整備していることが重要な指針となる
- (2) 京都大学など日本の URA リーディング大学が他大学の URA・職員に対して、人材育成カリキュラム等を提供することで、研究マネジメント人材を養成し、日本全体の研究力強化に貢献することが期待されている
- (3) 若手人材が憧れる職種となる URA のロールモデルを構築し、人材や体制が充実していることが、研究力が高い大学としての内外の評価に繋がると考えられる

第 1 部: KURA HOUR とポスターセッション

「研究力」の強化を目指し、京都大学は文部科学省による研究大学強化促進事業の支援を受けています。その事業における KURA の活動を、レクチャーと参加型ワークショップ、ポスターセッションで披露しました。レクチャーとワークショップは、京都大学附属図書館で開催している「研究支援のアンテナショップ KURA HOUR」の 3 プログラムをダイジェスト版で公開。ポスターセッションでは、9 人の URA が自分たちの活動を 1 分間のライトニングトークでも紹介しました。また、ポスターセッション会場では、研究大学強化促進事業の支援で KURA が実施する学内研究助成プログラム、「『知の越境』融合チーム研究プログラム SPIRITS」の平成 27 年度採択プロジェクト成果報告会を同時開催することで、研究者とシンポジウム参加者が直接、議論・対話できる場を設けました。以上の企画を通じて、第 1 部は参加者が「京大式」の多彩な研究力強化の取り組みに触れる時間となりました。このほか、KURA が制作しこれまで門外不出だった「科研費の教科書」の配布場所には多くの参加者 (60 機関/90 人) が詰めかけるなど、日本の URA システム定着化に向けた京都大学の先導的な役割に期待が寄せられました。

第2部：研究力強化の本質的な議論

「研究力」とは何か——。本質的な議論を目指した第2部は、KURA室長の佐治英郎・研究担当理事補による開会の辞と趣旨説明で開幕し、開会挨拶で山極壽一総長が、「京都大学では、大学と社会を繋ぐために学術分野を超えた幅広い知識をもつURAがさらに必要だ」と訴えました。来賓として招いた文部科学省研究振興局学術研究助成課の鈴木敏之課長の挨拶後は、大阪大学元副学長でリサーチ・アドミニストレーター（RA）協議会副会長の池田雅夫氏が「研究力強化の本質とは？」と題した基調講演で登壇。続いて、京都大学の研究者を代表し、東南アジア地域研究研究所の河野泰之所長と研究担当理事補の北川宏理学研究科教授、文学研究科の出口康夫教授が講演しました。



その後、URAと事務職員が「KURA報告」で、KURAの研究強化に向けた取り組みを紹介し、京都大学が掲げる『越境する知の拠点』の構築に向けた様々な取り組みを報告しました。紹介した取り組みは「越境」をキーワードに、大学経営の壁を越える『IR』、地域・文化を越える『国際』、学問領域を越える『学際』、組織・制度の壁を越える『RDP(Research Development Program)』、アカデミアと社会の壁を越える『産学連携』、逆風を乗り越える『人社系』、事務組織の壁を越える『事務』です。



以上の講演と KURA 報告を踏まえたうえで、パネルディスカッションに進みました。パネリストには、池田氏と北川教授、佐治室長のほか早稲田大学研究戦略センターの松永康教授を迎え、京都大学総合博物館の塩瀬隆之准教授がファシリテーターとして討論をまとめました。また、鈴木課長もコメンテーターとして参加しました。各パネリストからは、研究力の「本質」と研究大学における URA の役割について多くの提言がありました。特に、各大学の研究力強化に向けた取り組みの中でも、URA 人材が充実して体制が整い、若手人材が憧れる職種となる URA のロールモデルが構築されれば、学内外から高い研究力があると評価されると意見が寄せられました。

以上の提言のほか、パネリストは、今回のシンポジウムのように成果を積極的に発信している点を高く評価。京都大学など日本の URA リーディング大学が他大学の URA・職員に対して、人材育成カリキュラム等を提供することで、研究マネジメント人材を養成し、日本全体の研究力強化への貢献に期待を寄せました。

最後に、研究・企画・病院担当理事の湊長博副学長が、「URA の役割に対する共通認識を醸成することで、URA による研究支援に対する取り組みがより一層強化され、それらは大学の経営判断にとって有用な情報になり得る」と期待をこめ、盛況のうちにシンポジウムが終了しました。



第3部：研究力強化のためのネットワーキング

第2部までの内容に引き続いて議論できる場として、研究力強化を担う全国の大学 URA や研究機関の職員など約 80 人が集い、組織や機関を超えた交流が深まりました。

京都大学 URA 成果公開シンポジウム 2017 アンケート結果報告

「京都大学 URA 成果公開シンポジウム 2017：京大式～研究力強化の本質」を通じて、京都大学 学術研究支援室（KURA）が研究力強化に資すると考えて取り組んできた事業の理解度の測定と、学内外の URA・事務職員等からのご意見や感想を聞くことを目的にアンケート調査を実施した。

1. アンケート実施期間

平成 29 年 5 月 29 日（月）～6 月 9 日（金）

2. アンケート方法

シンポジウム参加者（220 名）に対して、アンケート用紙（別紙）による調査と Web アンケートによる調査を同時に実施（アンケート項目は同一）

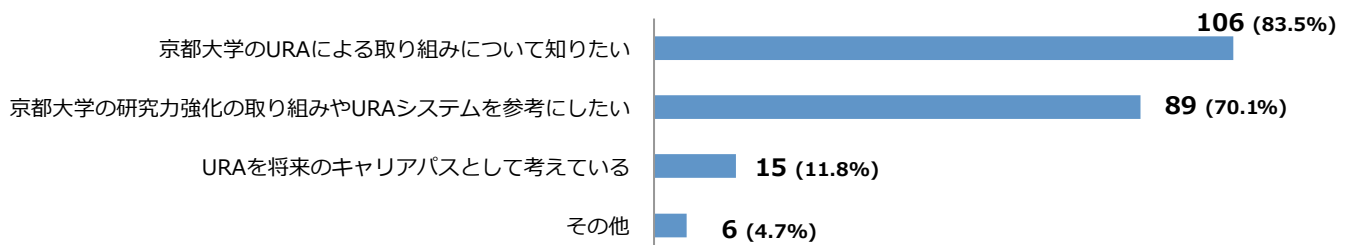
3. アンケート総数

有効アンケート回答数 128 件（全参加者 220 名のうち 58.2%から回答）

4. アンケート結果

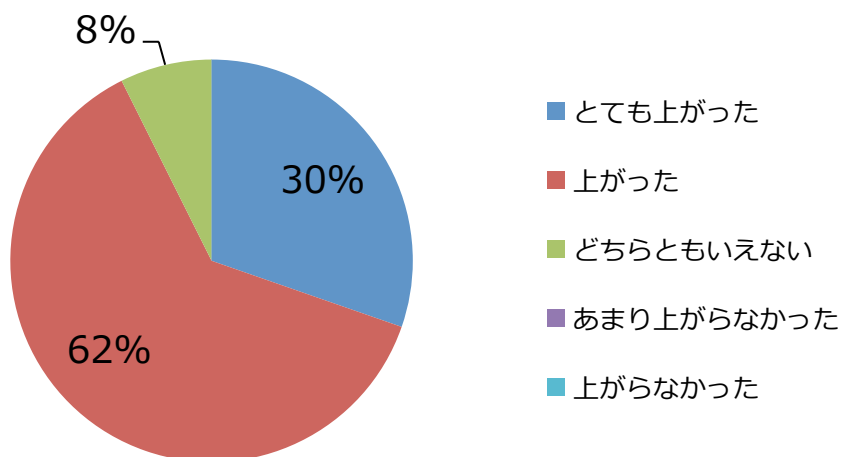
Q1. 本日のシンポジウムへ参加された動機を教えてください（複数回答可）

京都大学の URA による取り組みについて知りたい（106 名：83.5%）、京都大学の研究力強化の取り組みや URA システムを参考にしたい（89 名：70.1%）の 2 つが高い割合を占めた。次いで、URA を将来のキャリアパスとして考えている（15 名：11.8%）であった。その他の回答としては、大学の研究力強化について考えるきっかけとしたい、所属機関での URA 採用の参考にしたいなどの意見があった。



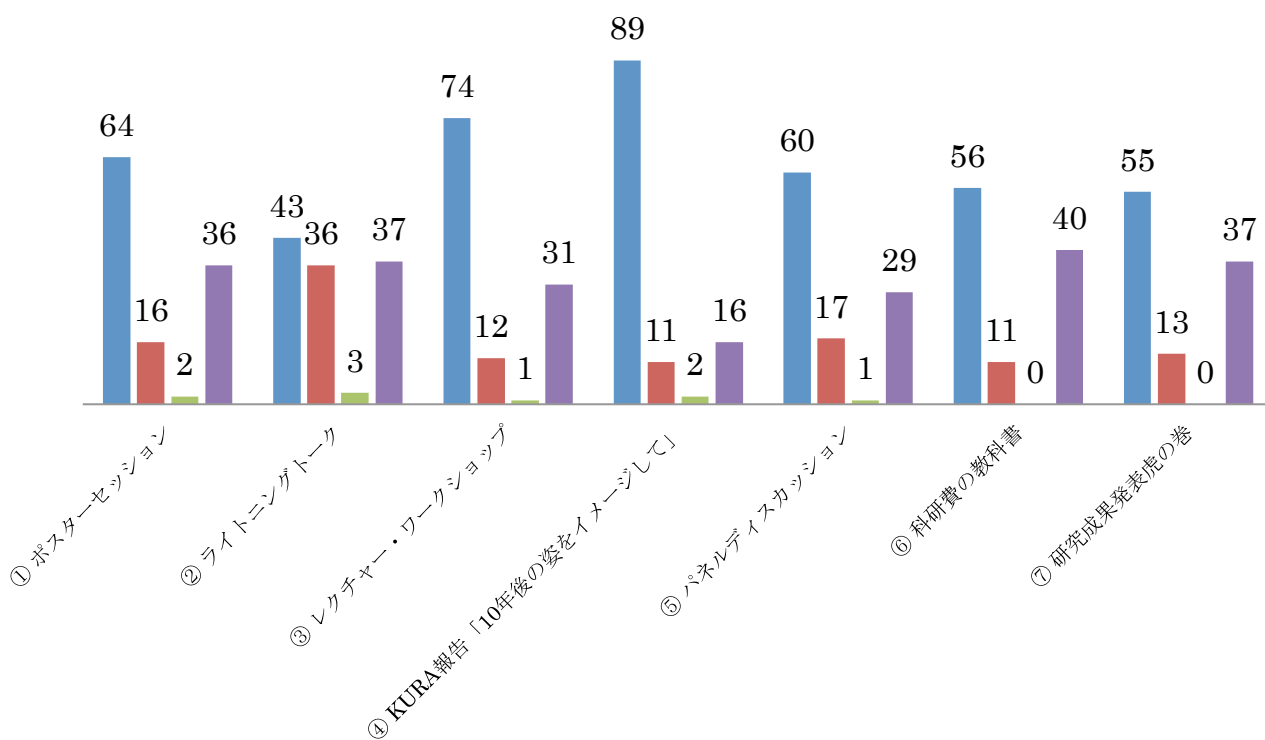
Q2. 本学の「研究力強化」の取り組みについての理解度は？

京都大学の「研究力強化」の取り組みの理解度が上がったとの回答は 92%（とても上がった、上がった）、どちらともいえないが 8%であり、成果公開シンポジウムは京都大学学術研究支援室(KURA)の取り組みの理解度を向上させる企画であった。

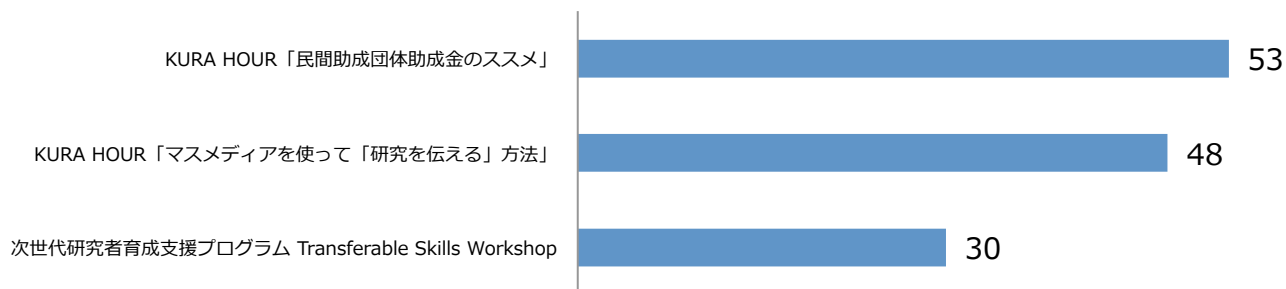


Q3. あなたにとって参考になる取り組みは？（複数回答可）

■ 参考になった ■ どちらでもない ■ 参考にならなかった ■ 参加していない

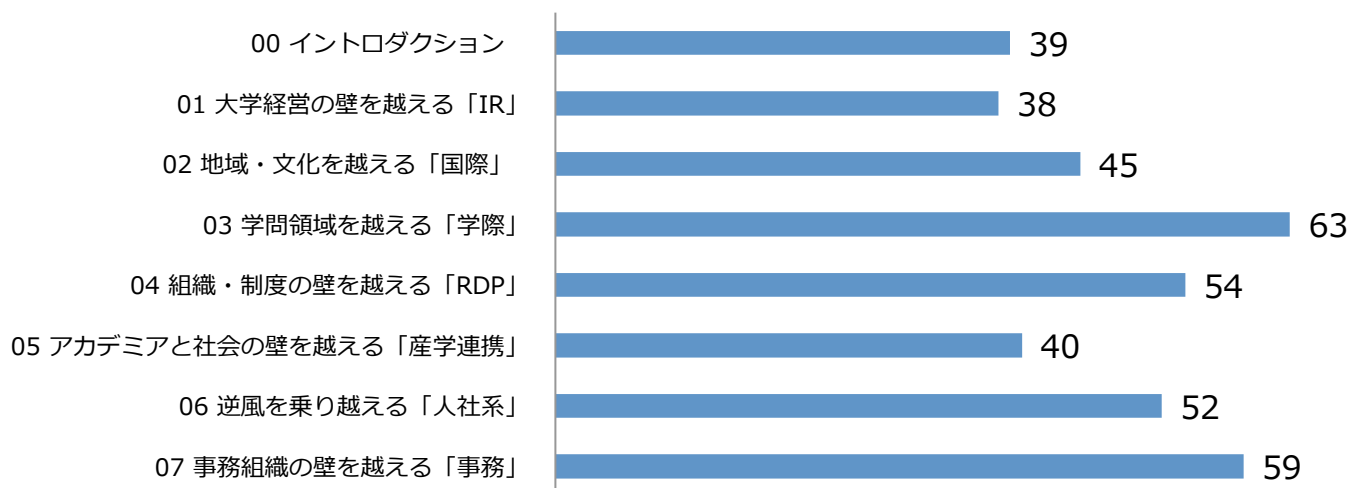


Q3-1. レクチャー・ワークショップで特に参考になった取組は？（複数回答可）



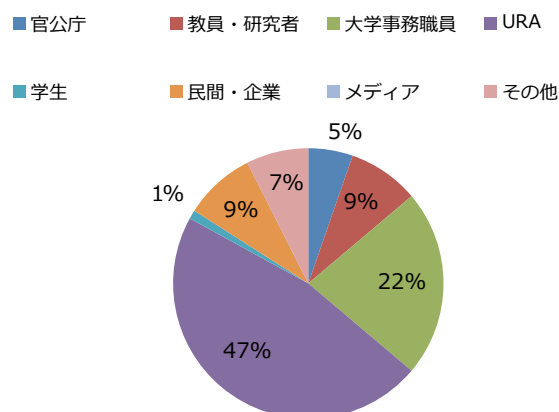
※次世代研究者育成支援プログラム Transferable Skills Workshop の参加人数は事前登録があった 40 人

Q3-2. レクチャー・ワークショップで特に参考になった取り組みは？（複数回答可）



回答者の属性

学外からは他大学 URA が占める割合が高かった（47%）。



学外回答者 94 名（学内回答者 29 名）

京都大学学術研究支援室（KURA）に対する要望や期待

日本の URA システム定着化に向けた先導的な役割に対して

（学内）

- さらに負担を増やすことにはなりますが、他大学で URA 制度導入を検討しているところの相談に乗るような窓口があれば非常にありがたいです
- URA の先端的活動をしている京大から発展、発信をしてほしい

（学外）

- 貴学の取り組みは当然他大学の手本となり、全国的な URA の認知や採用、地位向上、交流になるはずです。そして大学、国内の研究力の向上につながるようになります。大いに期待しております。
- いろいろな面、分野、領域で URA が工夫され活動している様子が良くわかった。自学へ戻り参考にして活用していきたい。
- 先進的な取り組みで国内 URA をリードして欲しい。
- 研究力強化と KURA の関係性の深まりに向けて一層期待します
- 研究大学強化促進事業後の新しいしくみの研究力強化事業の提案。
- 分析に裏付けられた取り組みと、実績もプラスされて、自身と誇りに満ちた発表ばかりで感銘を受けました。本学での研究支援を考えるにあたり、参考にさせていただきます。
- 先進的な取り組みやノウハウを本日のようにどんどん発信し、他大の執行部にも届くようにしてもらえると助かります。（URA が少人数の大学は多いので、外から背中を押してもらえるとありがたいです。）
- 日本の先導的事例として各大学に波及していくように勢力的に活動して行ってほしいと思います。
- 日本の URA2.0 のけん引を期待しています。
- 国立大学3分類で少し毛色が違うかもしれませんが、地域への取組もあれば紹介してほしいです。また、授業などを担当している方がいましたら、紹介してほしいです。大分大は専任3人でやっていますが、国際以外、だいたい似たようなことをしています。方向性が確認できました。
- 外部資金獲得が困難な人文系（特に教育系）の研究支援について発信して下さい。国は、「文系や教員養成系は縮小」のにおいをさせてますが、この分野も重要であると思いますので！！平成 27 年度採択プロジェクト成果報告会、来年度も続けてください。濃い内容でしたので参考になりました。多士彩々、経営判断、多国籍ラボ、カタリスト、研究の連鎖、オリジナル研究拠点、バランス目利き、日本の研究力 UP と URA との関係とても勉強になりました。
- より発信、交流を期待します。
- 研究の継続性と連鎖を生み出す支援の強化を期待
- 更なる HP での情報発信を期待しています。
- 今後もとがった企画をよろしく願います。
- 引き続き多様な場の構築に向けて頑張ってください！

URA 等の研究人材育成に対して

(学内)

- URA のための研修プログラムを開発して実践してほしい
- 昼食を摂りながら、定期的に行っているレクチャー等を受講できるようにしてもらいたい

(学外)

- 差し支えない範囲で、貴学のノウハウの伝授を目的に、学際(SPIRITS)や PM(いしずえなど)についてオープンワークショップなどのスタイルでケーススタディーの開催はいかがでしょうか。
- しっかりした基盤で活動されていると感じました。URA 人材の人事交流などがあると、国内の URA の活性化や個人のスキル UP につながるのではないかと思います。
- 趣旨とは違うのですが、URA と協働されている事務局スタッフ (大学事務) との交流を行えれば有難いです。
- 事務組織のように、ローテーション人事で様々な機能職種を経験し、専門性を高めるのではなく、ジェネラリストとしていろいろなことを見聞し対応力を身につけていくやり方は、その所属員にとっては、ある意味仕事をしながらも常にリフレッシュできる機会があり、長く勤務を続けていく上での個人のモチベーション維持には役立っているのかもしれませんが。
- 専門性を維持しながらリフレッシュできる機会としては、例えば、複数大学間での異動をスムーズに行えるような制度設計を今後検討できるとよいのかと思いました。しかし、その際に類似規模、類似システムを有する大学間での異動でないと、おそらく失敗すると思います。すなわち、京都大学で通用していた仕事の進め方がすべての大学で通用するかということ、おそらく追いつけない大学が特に地方大学では多いと思います。教員のレベル、執行部の URA 組織に対する理解の違い、事務組織との関係等々、おそらく各大学で千差万別です。URA の機能は重要だと理解されていても人事財源の問題等々で、理想的な運用管理がなされていない大学が実は多いように感じます。
- カタリストと目利きの自由度がある制度に出来るように期待したい。
- URA に求められる人材とやるべき内容についての視点、資質アップ (実践力)
- ワークショップに参加できればうれしく思いました。内容を教えていただけるとうれしいのですが。
- 可能であれば人文社会系フォーラムに参加させて頂きたいです。
- KURA の取り組みに関し、様々なアイデアを頂くことができました。是非、今後も定期的に、今回のような取り組み内容のご紹介や情報交換の場を設けていただけると有難いです。
- 若手研究者支援育成を参考にさせて欲しい。
- 本学の URA の活動の参考となりました。また、3月3日の人社系フォーラムではわざわざお越し頂きましてありがとうございました。研究者のみならず、URA どちらの連携も深められたと思います。本日はありがとうございました。
- 学術研究支援の先端を行く取り組みをされているので、今後も勉強会を開催して欲しい。特に、人文系の研究者に対する取り組みについて計画して欲しい
- 東京でも URA、研究推進に関するイベントを企画・実施していただきたいです。

KURA と研究力強化に向けた連携について

- 若手研究者数人が PI となってチーム研究に取り組みたい要望を、担当するさきがけ研究者から伺うことがあります。現職でも今後取り組みたいと考えてはおりますが、このような支援もご検討いただくと若手研究者の成長に資するかと考えます。
- KURA の方で科研費申請できる方と一緒に科研費採択を狙ってみたいです。 今回のワークショップのようなデータを教育学あたりの業績にして、申請できないでしょうか。今後、URA のような事業家視点をもった、ファシリテーター・カタライザー・アントレプレナー等の人材はいろいろな分野に必要です。
- 本大学でカバーできない研究者（共同研究者等）のマッチングを URA 間で相談できるしくみを構築してほしいです。（総合大学でない本学は専門外の研究者とのネットワーク作りが重要な課題となっております。）
- URA 同士の交流及び URA と連携している事務職員同士の、大学を超えた連携に期待しています。

KURA 取組みに関する感想

- 色々な取り組みのアイデア、とても参考になります。京大の中で認められる存在なのだな、と思います。なかなか経営や予算確保、グラント設計までさせてくれる大学はないと思いますよ。
- 研究費の獲得が目的ではなく、その後の研究者としての成長を見据え、研究者自身のテーマのうちどのように外部資金を獲得するか支援をされていることに感銘を受けました。
- 学術研究の成果は、産業界に引き取られることが全てではないと考えます（過度に実用化を意識すると、実体のない数値管理に縛られ、情熱溢れる自由な発想が枯渇する懸念を感じます）。経済原理では賄えない、芸術、文化、教育などを通じた一般への波及もあるものと思います。かつて在学中、「学生も教員も対等に議論できる」「面白さや感動を大事にする」ことを実感していました。そうした京大の「自由の学風」というブランドをこれからも維持できるかは、教員の先生方だけではなく、その価値を理解されている URA の方にかかっているように思います。KURA ならではの研究支援が続くことを願っています。私も研究支援に携わる者として大いに刺激を受けました。ありがとうございました。
- 関西の大学の発表を聞くと大変元気が出ます。関東地方の URA もがんばらなくては、と思います。内容については、日ごろ考えていることと違うことはありませんでしたが、うまくまとめてくださったと思いました。
- 人材が多様で非常に興味深い取り組みをされていると感心しました。
- 本学もエビデンスとうるさくなって参りましたが（=法人）、久々のお話で夢が大事とお聞きでき、なにやら目からウロコが落ちたような思いです。それを支える支援室様の重要性も良く理解できました。必要性をより感じるようになりました。今後とも何とぞよろしくおつきあい下さいますようお願いいたします。

以上